村上忠順翁顕彰会報

(上)村上忠順翁像　(左)村上忠明像
(石川美峰画 杉浦正明氏所蔵)

村上忠順翁顕彰会報　第15号
編集　村上忠順翁顕彰会事務局
発行　平成16年3月20日

目　次

・会長就任挨拶 …… 2
・歴史探訪 …… 3
・村上忠順をめぐる人々
　―物集高世の書簡から― … 4
・表紙のことども …… 8
・編集後記 …… 8

会長就任挨拶

村上忠順翁顕彰会　会長　近藤光良

昨年石川前会長の後を引き継いで会長に就任いたしました近藤光良です。会報の紙面をお借りしまして一言ご挨拶申し上げます。

村上忠順翁顕彰会も平成十五年で十五周年を迎えました。これまで石川隆之会長および田中伸一事務局長という名コンビで、郷土の生んだ村上翁の業績を追跡して来られました。この研究にはお二人のほかに、築瀬先生の絶大なるご支援を忘れることはできません。築瀬先生も御高齢のため今後のご支援も難しくなりました。当初から当顕彰会に携わってこられた主要メンバーが一度に退かれる中で、会長という重責をおおせつかり、まさに暗中模索の状態です。

幸い、忠順翁は偉大な方であったことから、その業績を顕彰するという点では事欠かないし、多くの諸先輩や、豊田市郷土資料館のご協力がいただけるために少し楽観視しております。

皆さんもご存じのとおり、忠順翁は江戸時代末期、全国にも知られた偉大な国文学者であります。それと同時に、今ＮＨＫの大河ドラマのテーマとなっていますが、密かに王政復古を目指す尊王攘夷運動の支持者としての政治家的側面も持っていました。忠順翁は紀行文にも見られるように、混乱する幕末時代にあって、江戸から京都に至る五〇〇キロ近い東海道の旅を通して、当時の世相の行く末をしっかり見据えていたのかもしれません。

今の日本は一見平和な時代です。しかし、この国は今後どうあったらいいのか、この地域はどうなってゆくのかも曖昧で、目標もなく過ごす毎日が、犯罪の増加する社会を生み出しているような感じがいたします。

こうした時代に何が大切なのかについて村上翁を学ぶことによって知ることができるのではないか、そんな密かな期待をもっております。

忠順翁顕彰会も、高岡町に残る閑静で落ち着いた明治時代のお屋敷である六鹿会館に活動拠点を移し、ゆかりの書物や遺品等を展示しながら活動をしております。今後は、忠順翁に負けない気持ちで、できるだけ多くの団体や個人とネットワークを結びながら、忠順翁のエネルギッシュな姿を浮き彫りにして参りたいと考えております。

最後に当顕彰会を楽しく、身近な会にするための皆様からのご意見やご提案をお聞かせいただくことをお願いいたしまして、就任の挨拶といたします。

平成十六年三月吉日

歴史探訪

五條史跡公園　代官所見学の一行

禁酒視察旅行――歴史探訪

神谷　初之

恒例の歴史探訪が、十月三十日突き抜けるような秋空の下に行われました。今までは一番遠い、奈良県五條市まで足をのばした。

毎回行き先は村上忠順の足跡を訪ねているが、天誅組に関与して、ここまで忠順が関連しているのには驚いた。

市立五條文化博物館を訪れたが、丁度天誅組の変一四〇年記念行事として、特別展が開催中で、あらゆる関連資料が公開されていたので、色々な資料も戴き、小嶋館長より「天誅組」について詳しい説明があり、一層歴史探訪の意識を深めた。展示品には生々しい血痕の付着した衣類もあった。

昼食は、五條市名物の「柿の葉寿司」で、他では味わえない食味で舌鼓を打った。午後は五條市内の天誅組旧跡並びに昔ながらに今も残る街並みを散策し、時代の流れを感じた。最後は柿の葉寿司の本舗売店で、土産を買い求め、五條市を訪ねた証しとした。

帰り道、市外にある天誅組義士橋本若狭の生誕地に立寄り、昨年七月に屋敷内に建立された記念石碑を拝観した。この碑文の中に「東吉野村鷲家口での最後の戦をかろうじて脱出。その後も勤王の志は何ら衰えず、三河の村上忠順宅に潜伏。」とはっきり忠順とのつながりが明記されていた。

顕彰会の歴史探訪は発足以来、毎年行い十五回を数え、毎回五十名までのバス一台であるが、この視察旅行は他では見られない多くの特徴がある。その一つは、目的がはっきりして内容が充実している。それには、毎回幹事が事前に全コースの下見に出掛け、あらゆる資料を集め、これに関連した資料も付け加えて出発前に全員に配布される。現地では、これに関連した講師を依頼して、詳しい説明が行われ充分勉強ができる機会が持てることと、行き先が殆ど観光旅行では出掛けたことのない土地であり、しかも昼食は必ずその土地の名物で、他では味わえないものが食べられる。

二つ目は、旅行中一切禁酒である。酒好きの方はつらい一日ではあるが、毎回これが守られ、他の慰安旅行とは一風変わった雰囲気であるが、誰一人として小言を言わない。バス内も静かで、となり同志のくつろぎも満喫できる。トイレ休憩も計画通り運行ができ、出発時間など一人も遅れる者もなく、行程表通りに進み、予定コースを計画通り全部回ることができる。参加した者も満足して終ることができるのである。

最近は誰しも、年数回の観光旅行に出掛けているが、日帰りなどではコースも同じようなところが多く、御馳走目当てか、義理にからまれて仕方なく出席することが多い。この顕彰会の歴史探訪は、新しい地区を探索する希望の持てる行事として、いつまでも続けたいと願っている。

村上忠順翁顕彰会歴史探訪に参加して

川村加代子

秋晴れの十月三十日「村上忠順翁顕彰会歴史探訪」に参加させていただくことができました。朝七時出発で奈良県、市立五條文化博物館で開催されている「そして五條から維新がはじまった・天誅組の変一四〇年」の展示見学、講話、そして市内散策と一日を過ごしてきました。「忠順翁顕彰会」の初めての参加で、忠順の人となりも地元出身、刈谷藩の御殿医であり国学者でもあったことくらいしか知らなかった私ですが、博物館での学芸員の講話、天誅組に因む遺品や史料等を見学しながら、五條から遠く離れた三河の地に生きた村上忠順、忠明親子やそのゆかりの人々がどのように思い、感じ生活しながら五條での「天誅組の変」に関わっていくようになったのか、とて

も興味深く感じ、聞くことができました。

大和五條新町通りでの散策では江戸時代には宿場町として、さぞや賑わっていたであろうと思われる街並み、時代劇に出てきそうな漆喰塗りの壁や格子のある家々が立ち連なる通り、天誅組本陣跡の桜井寺や代官所跡などを当時を思いながら、とてもゆったりとした時間を秋晴れの中、過ごすことができました。

歴史探訪最後の見学地は「天誅組の変」の後しばらく高岡の村上忠順宅に潜んでいたと伝えられている橋本若狭生誕の地に建てられている碑を見学。

川上の神の心をこころにて
濁れる世には澄むとそ思う

句を読みながら百四十年前、五條から十津川、吉野へと山深き山を越え、谷を渡って活路を求めて歩いたであろう道のりを想像し、また、どのようにして、どのようないきさつで遠い三河高岡の地に辿り着いたのであろうか興味は尽きません。

お世話して下さった方々、有意義で楽しい一日をありがとうございました。私の乏しい村上忠順像に少しは広がりができたのではないかと思う一日を過ごすことができました。

村上忠順をめぐる人々
―物集高世の書簡から―

中澤伸弘

歌人、国学者物集高世（もつめたかよ）は豊後杵築藩士で、同地の定村直孝に学んだ。直孝は渡辺重名や賀茂季鷹、城戸千楯についたと言ふので、大方の学統は察せられる。文化十四年に生まれたので忠順の五歳下に当り、忠順同様に明治まで生き、忠順に先立つ事一年、明治十六年に六十七歳で逝いてゐる。

現在、村上家には六通の高世の書簡がある。うち四通は忠順宛で、一通は紀州の熊代繁里宛、いま一通は詠草でこれは宛所の記載はないが、忠順か繁里宛であらう。

今回は村上斎氏の御好意によつて拝見する機会を得たので忠順と高世の交流を書状を通して描いてみたい。この忠順宛の四通は何れも万延元年頃のものであり、当時高世は『類題春草集』（以下「春草集」と略記）の初編を世に出した後で、二編の編輯上木にむけての最中であり、一方忠順も同様に『類題玉藻集』（以下「玉藻集」と略記）初編の編輯に意を傾けてゐた頃であつた。丁度この頃は歌集として盛行した加納諸平の『類題鰒玉集』と長澤伴雄の『類題鴨河集』の刊行も終へて、その影響をうけて各地で同様の類題の和歌集が編まれてゐたのであり、高世も忠順もその時流に乗つた編輯であつた。これらの歌集は本来は自分の知人や門人、師の歌を収める事を目的としたものであつたが、次第に全国各地の歌人や歌壇に歌を募る様になつていつた。こゝに紹介する書簡もその一端がうかがへるものである。忠順も高世も明治まで生きたのだから、この二人の交流はなほ盛んなものがあつたと思はれるものの、村上家には万延期の四通しかないのが残念である。この四通を万延元（安政六）年頃のものとしたのは、忠順による裏書きのあるものが二通あり、「庚申」とある事による。この庚申が丁度この年にあたり、また『春草集』初編が上梓されてゐるとの記載内容から考察した。『春草集』初編は安政四年の刊である。

四通のうち三通は当時通常の書状で用ゐられる候文であり、一通は擬古文（古文になぞらへて作つた文）である。候文はいま便宜上やゝ口語訳を交へてわかりやすくしたが、擬古文は当時の高世の文章力も偲ばれる資料となるので原文を翻刻し、註解してみた。

忠順と高世の交流の初めは万延元年春にあった様で、紀州の本屋阪本屋喜一郎がその中介に当つた様である。阪本屋は若山の出板書肆で多くの書物を出板してゐる。忠順の『玉藻集』もここから世に出る事となる。

㊀〈三月十一日付書簡　先生は忠順の事〉

紀州の書林阪本屋喜一郎殿より、先生が預けられた品を慥かに落手しました。阪本屋から愚詠（高世の歌）を差し上げる様にとの事で、先生が類題歌集をお選びになつてゐるとの事、愚詠と社中の歌を取り集めて差し上げよとの事でみな畏こまつてます。このたび大阪行きが明日なのですが、類題集極めてお急ぎの様だと喜一郎が申しこされましたので、まづ愚詠を送りますので、選入して下さい。社中のものは後便で、西田惟恒か阪本屋に送ります。乱雑で申しわけありませんが、今後も文通をお

願ひします。

三月十一日

村上先生

私が撰んだ類題春草集初編は出来ました。二編は上木中で引つゞき三編を今冬中にものして来年正月に上木したいので、御社中の歌も取りまとめて大阪書林秋田屋太右衛門方にお送り下さい。

以下の書簡からもわかるが、この当時の手紙の往来は飛脚を用ゐるよりも、出板流通にのつた書肆を通して、書物とともに行なつた方が早かつた様で、忠順も高世もそれを利用してゐる。

さて、豊後の高世の許に、忠順が類題の和歌集を編むので、高世とその門下の歌を集めるといつた情報は、紀州の本屋阪本屋喜一郎から齎されてゐる。この年後述する西田惟恒は『安政年々歌集』を上梓してゐる。『安政二年百首』以来、五年間の年々集を一冊にまとめたもので、その巻末に忠順の『玉藻集』編纂の広告が載つてゐる。

類題和歌玉藻集　一編全部二冊宛

此書は三河国苅谷(ママ)御藩蓬盧村上先生とし比かりそめに書つめ置給へるをこたびこひ出て世に普く弘めむとす　初編出板近きにあり尚二編をもすゝめ聞こえてつぎ〳〵に上木せんとす　若これに入らむと思ほさむ君たちは御詠草をおくり給ふべし

とあり、歌稿に「御国所御姓名御通称」を委しく書いて送つて欲しいと記し、その詠草の取次所として京の城戸市右衛門ほか若山では阪本屋喜一郎、同大二郎、同源兵衛の名前が見えてゐる。忠順の『玉藻集』の出版は阪本屋が行なつたが、ここは斯様に和歌を集める事務を行なつてゐたのである。

書簡で高世は船で大阪へ行く急用があると告げてゐるが、多分に自選の『春草集』二編の件で秋田屋へ打合わせに行くのだらうと思はれる。興味深い事は社中の歌を西田惟恒か阪本屋に送ると記してゐる所である。惟恒は紀州の本居内遠門の人物で、当時『安政年々歌集』についで『万延元年六百首』の歌集を編んでゐて、紀州における歌集編纂の中心的人物の一人であつた。私は嘗て惟恒の一考察を国学院雑誌に発表した事があるが、忠順とも交流があり、且つ高世の『春草集』の校正を手伝つた人物なので、忠順と高世の双方と相識る人物であつた。惟恒に歌を送れば阪本屋に通じる事を高世は知つてゐたのであらう。

なほ追ひ書きによると、二編は板木に彫らせてゐる様で、来年正月には三編を上木する予定が記されてゐるが、実際には金銭的な行き詰まりがあつたのか、二編はこれより二年後の文久二年に世に出、三編は遂に出る事はなかつたのである。このことは奥田恵瑞、秀共著の『物集高世評伝』に記されてゐる。

㊁〈十月十七日付書簡〉

……七月の廿日比のとそののち又いつばかりのにか、時は忘れ侍りし、それとあはせて両度なむたまはりぬる。はやうあつらへおこせたまひしふたむら山の歌よみて参らせつる、御よろこびとてかくはしきみちにたまへりしは、世に思ひたまへかけぬ事にて、空より降り来たるここちなんはべりし、そのをり過さず御返事すなはちにとは　かへす〳〵思ひたまへしかど　さりがたき事の侍りしにもだされて　今になりぬるおこたりよ　ここそ物しておぼしめすらめ

いかでゆるさせたまへかし

さていとさむき比に成侍りぬるをいかに過したまふぞ　又かの玉藻集はいかに　今はすり巻出来はべりつや　とく見まほしうなむ　高世か歌は入り侍らずとか　いまだ板に彫らせたまはぬほどならむには　いかでいかにもして一二首なりとも入れたまひてよ　さらではその集見たまへむにもあいなきここちのし侍るべきを　さぞとおぼさば此事なほざりにな聞すぐしたまひそとよ　いでや猶聞えさすべきことどもは、あまた侍れどけふはいとそがはしき事のあればとどめ侍り　又のをりにこそは

又わすれ侍りき高世が春草集のれうにとておこせたまへる御詠草はたしかになむたまはりぬる　二編はすでに板に彫りをへはべりつればこれは三編にこそは　あなかしこ

神無月十七日　　物集高世

村上先生

なき妻高が事をねもころにとぶらひおこせたまへるは　いとうれしうなむ　かれは年来心をいれてをしへ侍りしかば歌もすこしはよみならひたるやうに思ひゆるして

ちかきわたりのむすめどもの物かくには　その筆のしりとらせし事も侍り　高世が好めるすぢをも致

こころさしいそしみ侍りしかば

妹背のむつびはさるものにて　さる才につけてもいとらうたくになきめに思ひたまへて　しばしのほどもかたへさらせず　かれはた常にもひとりばみてなにくれと物とひきく事を身の楽しみになむし侍りし　さるをいぬるとし讃岐の旅寝にともねし侍りしより　枕あがらで終にはかなく成侍りし　悲しさはいか斗ともえ聞えじ

その年高は三十　高世三十二才に侍りき　ただおしはからせたまへかし　さてかれが書捨たらむ短冊やうのものあらばとのたまひおこせたれど　はやく人の乞まゝにとらせて全部なくなり侍り　但し物の底などに埋れたらむも猶侍らば見出たらむをりに　必参らすべし　さてこのついでに〇のえさす高が十三回忌の追慕の歌、繁里ぬしなともたまへりき

夏懐舊の題にてなり　春草集三篇にそのあつまれるを出さんとなむ思ひたまふる　貴人もいかでよませたまひてよ　かれあはれとおぼしめす御心おはさばとなむ　かたはらいたしやかくまでよし　おのが妻の事を〇たるは（〇八判読不明）

擬古文は候文とは違つて格調のあるものである。この書簡の裏には忠順の筆で「万延元年庚申冬　高世」と記されてゐるので、これに従へば万延元年の十月のものと判る。すると忠順はこの年の七月廿日付のと、それ以後に一便の計二通の手紙を高世に出してゐる事がわかる。

高世は二通の手紙を貰ひながら思ひがけない事があつて今となつたと詫びたのち、忠順の玉藻集の進行状況を気にかけ、自分の歌を一二首とも入れてほしいと強い希望を述べてゐる。「高世の歌は入り侍らずとか」との仄聞を記してゐるが、この三年後に刊行された忠順の『玉藻集』の初編には高世はじめ十一歳の高材の歌も採られてゐるが、豊後人は計四人で大変少ない数である。因みに二篇には豊後人は高世を含め二十六人と増えてゐて、物集家関係では高見、高材、高徳、楽女、弓女、英女、有田高子の歌が採られてゐる。歌数で言ふと高世は三十一首、高見、高材は各一首である。忠順の高世への評価がうががへる。

書簡は更に春草集用の御詠草をたしかに受け取つたが、二編は板を彫つたので三編に入れると記してゐる。忠順は高世の元に歌を送つたと見えるが三編は出板されなかつたのでこの歌稿は空しくなつてしまつた。なほ二編には忠順の歌は待春、早夏、夜菖蒲の三首が採られてゐるに過ぎず、また春草三編のあとを受けて明治十四年に板になつた、高世の『類題採花集』には忠順一首、息忠明一首しかなく、忠順在世中の出板に斯様な態度をとつた高世に疑問を抱かざるを得ないでゐる。共に晩年の事である。

以下書簡は有田高子の事に及ぶ。高世には春子と言ふ妻がゐて、その間に高見が生まれたが、春子亡きあと、後妻として貞子、若子、政子の三人がゐるが、更に有田高子がゐてその間の子に高材がゐる。高世は高子への思ひ入れが厚かつた様で、その忘れ形見高材についても愛情を注いでゐた様で「十一歳高材」などとわざわざ年齢を記して、この期の類題の和歌集に投じてゐたりする。

書簡は言ふ。「亡妻高の事を懇ろに弔つて下さり有難い。高子には年来心を入れて教へたので歌も上達し、妹背の睦びもさるもので、才能がすばらしいので愛らしく特別扱ひしてゐたが、先般の讃岐の旅寝に一緒して病気となつて死んだ。高子三十歳、高世三十二歳であつた。悲しさはこの上ない。書き捨てた短冊があればとおつしやるが、人の乞ふままに与へたので全てない。見出したら送る。十三回忌追慕の歌を熊代繁里などより夏懐旧の題で送つてきたので春草集三編にそのまま入れる、歌を送つてほしい」と。高世はこのあと高子の歌稿を送つたとみえ、忠順の『玉藻集』二編には高子の歌十四首が採られてゐる。高子は嘉永元年歿なので、この万延元年が十三回忌に当つた。熊代繁里などから寄せられたせつかくの歌も、三編が世に出なかつたために空しくなつてしまつた。

㊂〈八月十六日付〉文久元年？

紀州の坂本喜一郎からの手紙で、熊代繁里、西田惟恒、また石見の人（不明）よりの書状が一緒に届いた。船が今夕に出るので忙しく乱筆で返事をさし上げるのでお許し下さい。さて昨年九月廿日付の忠順様の書簡、紀州の熊代主の書状を添へて慥かに届いた。有難く拝見（挨拶文が続く）

さて玉藻集三篇の編輯が終つて珍重の至り、こちらも春草集三篇の板下ができた（一部を上木してゐる）

なほ先年御送りいただいた荊婦物集高子の十三回忌の詠は本当に有難く春草集三篇へ入れたい。御好意に感謝します。いろ〳〵と申しあげたいものの急便ですので省略します。

何分にも遠方なので書状が着きにくい。今回のも可なりの延着で誠に遺憾な事です。深見氏のほか門下生にも宜しくお伝へいただき、春草集四篇の料に歌を御恵み下さいます様お願ひします。恐言謹言

八月十六日　物集高世

村上先醒（ママ）

三通目八月十六日付の書簡は文久元年のものと推考される。書簡によると忠順は一年前の万延元年九月廿日付で書簡を高世に呈したが、約一年かかつて他の人々の書簡と一緒に八月十六日に届いた。高世はそれに対しすぐ忠順にこの返書を出した。先掲㊂十月十七日付の高世の返事の折には、当然目を通してゐた筈の本書簡は、その十ヶ月後に届くこととなる。現在では考へられない郵便事情である。先の十月十七日付書簡で高世は高子十三回忌の詠が熊代繁里らから届いた事を記し、忠順にも依頼してゐるが、忠順は本書簡で既に送つてゐた筈なので不審に思つたであらうし、再送したのかも知れないが、何れにしろ十三回忌詠を送つた事がそのお礼の文からわかる。第三編に入れると言ふが、遂に三編は出版されなかつた。高子十三回忌にどの程度の歌が寄せられたかは三編草稿が見つからない限り不明であるが、高世がその残り歌稿などをまとめて明治十四年に出した『類題採花集』に有田高子が十三年の霊祭に夏懐旧といふ題で五嶋啓典の歌が載せてある。先の熊代繁里が寄せた歌も「夏懐旧」の題だつたので同じ折のものだらう。ついで忠順の歌が続くが、高世がここで礼を述べてゐる歌はこれかもしれない。

同じ霊祭に、昔高子が「君にわかならされにけるから衣ふるき妻そと見るらんもうし」とよめりける歌鴨河集にみえたるを思ひて

人心ときあらひきぬのとけがてに見えにしをりや悲しかりけむ　忠順

とある。高子の歌も忠順の歌も「衣」の縁語を多用した巧みな歌であるが、高子のは『鴨河集』の三郎篇雑の部に次の詞書で記されてゐるものである。

人のさまたげによりて　おもはずなことといできて夫のかれ〳〵になりけるころ　これときあらひてよとてきふるしたりける衣をおこせけるを　さるべきやうにてうじてかへす時　その衣のつまにむすびつけける

忠順はこの歌から高子のことを偲んでゐる。

高世が高子を連れて豊後から讃岐へ出奔しなくてはならなかつた事を、忠順は承知してゐたのであらうか。

この頃玉藻集の三編の編輯が終つた事、高世も三編の板下が出来、一部を上木しかけてゐる事がわかり、手紙の延着を遺憾としつつも四編を編むので深見氏ほかの門人にも声をかけて、歌を送つてほしいと頼んでゐる。高世側の活動は当然の事、忠順側の動きも書簡から読み取れ、その順調な編輯の様子がうかがへて面白いが、いざ出板となると書店の都合や出板資金の問題などもあつて滞つてしまふのもやむを得ない事だつた。次の書簡はその事をも伝へてゐる。ここは本文のまま載せる。

㊃〈十二月十八日付〉文久元年以降拙著葎屋歌談板下迄出来仕候へども可然銀〇無之候　未上木不相成候

◎此物なきにこまり申し候

厳寒之節尊館皆様益々御安泰可被遊御入珍重之御儀奉拝賀候　御選玉藻集ニ門人御選入御願申上候　因而詠草差上候　御加入奉願上候御思召不合候處ハ無御遠慮御添削奉願候

御集二篇は未だ上木ニ不相成候哉

世上不穏ニ候へども拙選春草三篇は此度上木に相成申候　極急便故萬諸省略仕候　返さも右之儀奉願上候

十二月十八日　物集高世

村上先生　上

この書簡の年代は特定できないが、文中にある「御集二篇は未だ上木ニ不相成候哉」から推考すると、初編を手にした上での問ひかけと考へられる。忠順の『玉藻集』初編は熊谷武至氏の考證によると文久三年二月なのでそれ以降の事であらうか。文久元年八月の㊂書状では春草集三編の一部が上木したと記してあつたが、ここでは三編は「此度上木に相成」としてゐるので、やはりそれ以降の事である。門人の歌を添削してまで採つてほしいとの依頼には師としての強い希望が読み取れる。ここで『葎屋歌談』の板下が出来たが費用がないので困つてゐると述べ、◎の様に金子の絵を描いてもゐる。この頃高世は藩の費用流用の罪により、赤貧の暮しを余儀なくされてゐた。歌集や歌談の出板よりも毎日の生活が苦しかつたのである。

『葎屋歌談』は春草集の巻末の広告に「初篇三冊」として

こは先生のもとにあつまるをちこちの歌人たちの歌かたりを記して　それにつけて心得べき事どもを多くさとされたり　真に歌のいたりたるところを知らんとせん人は必見ずはあるまじき書なり

とあつて、高世の歌論と言ふべきものであつた。板下は出来てゐたことがこの書簡からわかるものの現在は行方がわからないでゐるのが残念である。先にも述べた『春草集』の三編については、明治になつた『類題採花集』の自序で高世は言ふ

三篇は板にもゑりをへ、読あはせもしをへつるを、いかなればにか書肆にとどめ冊子にてうじて売出す事をえせねば、さりとも世にはしる人なく……さるはねたくもあるわざかなと思ふ……

書簡に言ふ「上木」は事実であつたが、出板に至らなかつた理由は不明である。丁度その頃物集家は先述の通り生活苦の中にあり訴訟まで起こる始末であつたので、或は秋田屋がそれを見越しての出板差止めであつたのだらうか。何れにせよ全国から歌を集め、教へ子門人からは出板の費用も集めた高世にとつて、この三編の出板が叶はなかつた事は大きな心残りであり、信用の失墜に当る物であつたらう。当然のことながら忠順は三編についての問ひ合はせもしたであらうし、高世もその詫び状をものしたと思はれるが、それは現存してゐない事が惜しまれる。

以上村上家に残る物集高世の四通の書簡の紹介を通して、忠順と高世の関係を記してみた。歌稿をお互ひに送り、それぞれの歌集に歌を載せてもらふ営みは、当時広く行はれてゐたのであり、その一端を伺ふに足るものである。因みに高世の編んだ『春草集』二編に採られた三河人は忠順、忠浄、八千代の村上一族と深見篤慶とその妻登之野（忠順女）の計五人で、いづれも忠順との関りの深い人物である。忠順は門人の歌は三編以降に送つたのであらうが、逆に忠順の編んだ『玉藻集』二編には、先にふれた通り、高世一族七人を含めて二十七人に及ぶ（一人は讃岐人）門生を載せてゐる。忠順の高世に対する配慮を私などは感じてしまふのであるが思ひ込みであらうか。なほ熊代繁里宛の清渚集に関する書簡については『和歌山地方史研究』の方に一文を投じた。

表紙のことども

表紙の肖像画について　堤町の杉浦正明氏所蔵の村上忠順翁および忠明の扁額である。両作品ともに「美峰謹寫」とある。この扁額は、戦中・戦後しばらくの間、堤小学校で掲揚されていたが、校舎改築の折に本来の所有者・杉浦家に返還されたという。温和な人柄と凛とした翁の生き様が伝わってくる。また、明治維新の嵐を直前にして、心ならずも「草莽の士」として二十二歳で亡くなった翁の次男忠明の肖像画は、ひときわ鮮やかに描かれている。

石川美峰について　明治二十五年堤町の石川梅三郎氏の六男として出生。高等小学校卒業と当時に上京。川端画学校を修了し後、山川秀峰の門をくぐり日本画を学んだ。時事新報社等に勤務しながら「浅間の秋」など名品を多く残した。

杉浦兼次郎について　安政六年（一八五九）杉浦家九代目として出生。明治三十八年（一九〇五）堤尋常小学校が校舎不足で困惑していた折に、村上忠浄(58)、原田釟太郎(33)とともに校舎一棟を寄付したのが杉浦兼次郎(46)。堤谷の旧家のひとつであり、現当主　杉浦正明氏(十二代目)の曾祖父にあたる。

いつ描かれた肖像画か　さて、忠順、忠明、忠浄、久太郎、兼次郎そして美峰の接点を推測すると、以下のようになろうか。時は昭和初期、満州事変を数年後に控え日本も大きく胎動しようとしていた頃、画風を確立した地元・堤町出身の美峰に、肖像画作成依頼をしたのが入寂を迎えようとしていた兼次郎(68)。忠順永眠して五十年目のこと。忠明の鮮やかな甲冑姿の緋が眼に沁みる。

編集後記

幕末の平民は、確立された身分制度の下さぞや窮屈な生活を強いられていただろうと思い込んでいた。しかし、杉屋の主人に「逝きし世の面影」という外国人の目から見た本を紹介されて、眼の鱗が落ちた。幕末の平民の多くは、緑豊かな環境の中で、なんと心豊かに、実に自由闊達に暮らしていたことかと。

視点を変えて物事を多面的に見ることの大切さを痛感させられた。わが忠順翁は、明治維新の大きなうねりのなかで何を見つめ祈っていたのか視点を変えて眺めることを猛省している。

（近藤）